北 基本テーマ その自然と人
Muse Letter ミューズ・レター
2002.05 No.11 発行● 札幌市博物館活動センター
〒060-0001 札幌市中央区北1条西9丁目リンゲージプラザ内
電話 011-200-5002 FAX 011-200-5003 http://www.city.sapporo.jp/museum/

“アカシア”の正体は、にせもの?!

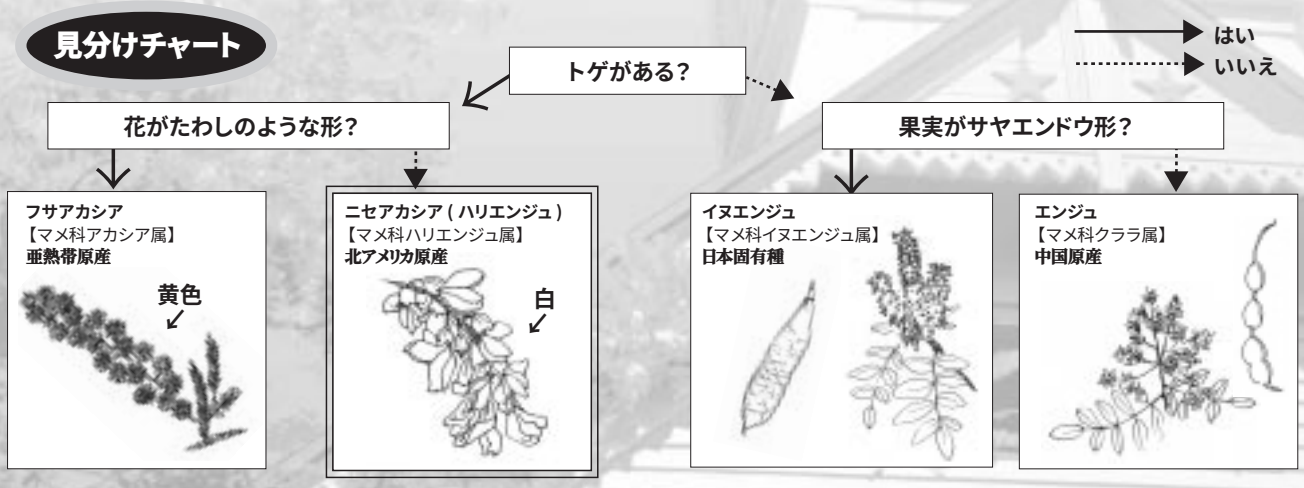
札幌の街中に紫色の香りを漂わせ、初夏を告げる花ライラック。札幌市の木にも指定され、全国から訪れる人々にも知られている札幌の風物詩です。しかし、もう1つ、同じように初夏の札幌を飾る街路樹を忘れていませんか?花は白くブドウの房のように集まり、垂れ下がって、強い香りを放って咲く「ニセアカシア（別名ハリエンジュ）」です。

これに似た名前でアカシア、イヌエンジュ、エンジュという木もありますが、それぞれ別の種類です。そのことは学名にも表されていて、その植物がどの仲間に入るかを示す属名がそれぞれ違います（左表）。日本語の名前は似ているのに違うなんて、なんだかややこしいですね。この4種類をどうやって見分けるというのでしょう?名前や説明だけを聞いてもピンときません。そこで、植物が与えてくれる手がかり（花・葉・果実など）を使って植物の正体を明らかにしていきます。その観察の手順をわかりやすく簡略化して書いたのが下の図です。

	属名
ハリエンジュ……（ニセアカシア）	*Robinia*
エンジュ……	*Sophora*
イヌエンジュ……	*Maackia*
アカシア……	*Acacia*

この図を名前のほうから逆にたどってみると…アカシアとニセアカシアのそっくりなところは鋭いトゲがあることだとわかります。ニセアカシアのことを「アカシア」と呼んでいる人が多いようですが、実はアカシアの花は黄色いタワシ状で、普段みている白い花とは別物であることもわかります。

さて、「アカシアの花」は時計台と共に童謡『この道』に登場します。この歌で歌われているのは果たしてニセアカシア、アカシアどちらなのでしょうか?ニセアカシアは北アメリカ原産で、北海道の寒冷な気候にも耐えられる一方で、アカシアは亜熱帯原産のため暖かい気候を好みます。ですから今から193年前（明治21年）、駅前通に初めて植えられたとされる「アカシア」は、ニセアカシアだと考えられます。この歌が広まった昭和初期にはすでにニセアカシアは6月の札幌の街に香っていたことでしょう。とすると、この歌を歌うときは「白くてブドウの房のように集まり、垂れ下がって、強い香りを放っている花」を思い浮かべたほうがよさそうです。



“キャッスル”の秘話

北川芳男（元北海道開拓記念館学芸部長・理学博士）

スミソニアンのシンボルとして多くの人々に親しまれている“キャッスル（城）”は、フランス・ノルマン地方の城郭を模倣した建物で、赤色砂岩でできている。この建物は、スミソニアン協会の最初の事業として、1847年、ジェームス・レンウィックによる設計から始まり、8年の歳月を経て1855年に完成したものである。ナショナル・モールの一角に出現したこの城郭のような建物に多くの市民は驚きの目を見張った。しかし、建物の色合いや形態がヨーロッパ調だったために、完成直後は周辺の街並景観にマッチしないと議会筋などからいろいろクレームがでるなど大きな話題を呼んだ。

この建物の中には、協会の事務所、図書館、そして、アートギャラリー、自然史の標本展示室、研究室、レクチャールームなどが設けられ、スミソニアンの本格的活動が始まるのであるが、驚くことに、この建物には初代長官のジョセフ・ヘンリーとその家族のための住宅や独身研究者の宿舎までもが組み込まれていた。ちょっと日本のセンスでは考えられない話であるが、長官のヘンリーは物理学者としてスミソニアンを世界的な研究所とするためにエネルギーを費やし、32年の在任期間を通して、研究面の充実を図った人物であり、彼の研究への情熱が、職住一体で研究事業を発展させようという考えを生み出したのかもしれない。いずれにせよ、初期のスミソニアンの迫力を感じさせる話である。

このように、建物内で個人生活がなされていたのが原因かどうかはわからないが、キャッスルの完成から10年、1865年にまったく予期しなかった火災が発生した。キャッスルの中央部の屋根は倒壊し、資料を運び出す余裕もなく、貴重なスミソニアン初期の記録類の多くが焼失してしまった。まさに、青天の霹靂（へきれき）である。復旧には2年の歳月が費やされたのである。1881年、スミソニアン最初の国立博物館（現在の芸術産業館）が隣接して完成したので、キャッスルは1880年代に全面的な改造と拡大工事がなされた。

現在、キャッスルは、全スミソニアンの管理センターとスミソニアン・インフォメーション・センターになっている。

ところで、この“キャッスル”とパテント・オフィス（当時の特許庁、現スミソニアン国立アメリカ美術館）は、日本博物館史の第一頁を飾っているという興味深い事実がある。それらは、1860年（万延元年）、幕府が派遣した遣米使節団の団員たちが、日本を代表して初めて見学した博物館施設だったのである。彼らは、日米修好通商条約の批准書を交換するためワシントンを訪問し、スミソニアン・インスティチューション、つまり、“キャッスル”やパテント・オフィスの展示を見学し、その内容や感想を種々の報告の中に記述している。これらの報告は、明治期になってからはじまる日本の博物館設置計画にいろいろな影響を及ぼしたのである。

キャッスル

トーマス・ブラキストン（*1832-1891*）

人物伝

津軽海峡を見下ろす函館山の山頂に、一人の英国人の記念碑が建っています。 20 年余りにわたり函館に居住した彼は、この海峡に「ブラキストン・ライン」と自らの名を残しました。

1832 年、イギリスの貴族の家に生まれたブラキストンは、軍人、探検家、鳥類研究家、実業家と実に多彩な顔を持っています。彼が函館（当時は箱館）へやって来たのは 1863 年（文久 3 年）。ここで彼は、北海道で最初の蒸気機関による製材工場を興し、さらに函館と下北半島を結ぶ定期連絡船を運行するなど貿易や海運事業に活躍します。

こうした事業のかたわら、彼は北海道と本州を行き来して鳥類の採集と研究を続けました。その結果、津軽海峡を境にして南と北の動物の種類に相違があることを発見し、その原因が過去の氷期にあるという見解を発表して、学会の注目を集めます。この功績により津軽海峡は、「ブラキストン・ライン（線）」と呼ばれるようになりました。ブラキストン線はサル、カモシカ、モグラなどの北限、ヒグマ、エゾクロテン、シマリスなどの南限として、現在でも哺乳類の分布境界線として重視されています。

ブラキストンは日本の近代工業や海運・貿易の発展に貢献したばかりか、このように学術面でも名を残しますが、民間人であったことや事業をめぐるトラブルのために、ケプロンやエドウィン・ダンなど同時代のお雇い外国人ほどには評価されてこなかったようです。

しかし、彼が採集した鳥類の標本 1300 点余りは、今も北大植物園博物館に大切に保管され、彼の功績を語り継いでいます。（参考図書「蝦夷地の中の日本」「お雇い外国人」など）

今年度のカレンダー（詳しくは「広報さっぽろ」で 1ヵ月前にお知らせします）

4 5 6 7 8 9 10 11 12 1 2 3

体験学習会

★化石採取（空知川） ★豊平川の地理
★水生昆虫採集 ★秋の自然観察会
★春植物観察会 ★昆虫採集（定山渓） ★オオギハクジラの発掘

博物館講座

●博物館フォーラム ●封入標本作製講座
●夜間講座（5 回）→ ●ボランティア養成講座（4 回）→

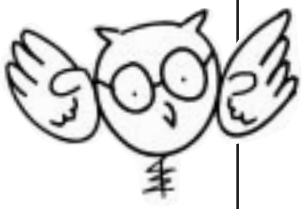
企画展

●第 3 回企画展「芸術の森の自然」
●第 4 回企画展「水生植物」
●第 5 回企画展「世界の蝶」
★サロン企画展「さっぽろのふわふわ」

よろしく★ポムで～す !!

2月～3月に行っていたマスコットキャラクター愛称選挙、ポム VS ミューズク。来館者のみなさんに投票していただいた結果、36対25で『ポム』に決定しました。ご協力してくださったみなさん、ありがとうございました。名付け親の方には、花や昆虫のアクリル樹脂封入標本が贈られました。

名前もついたことだし、これからは本格デビューです。夏に向けてセンター内だけではなく、野外にも飛び出すぞ!



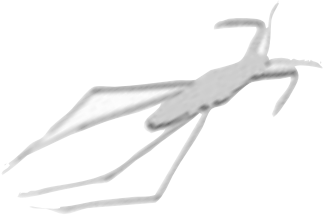
博物館活動センターからのお知らせ

5月より火～土曜日開館します。

閉館日はこれまでと同じ、日・月・祝。

博物館体験学習会

水生昆虫採集



水の中の虫って、どんな虫?!どんなところにかくれているのかな?
6/15(土)豊平川河畔を予定しています。

【参加申込】ハガキまたはFAXに、行事名（水生昆虫採集)、住所、氏名、年令、電話（FAX）番号を記入して札幌市博物館活動センターへ。6月6日（木）必着。小学生は保護者同伴。

夜の博物館講座

『科学はロマン』

5回シリーズ第2回

「科学は文化である」との若濱先生のお言葉。その心は?!

タイトル:「科学に国境はあるか?」
講師:若濱五郎(北海道大学名誉教授、雪氷学)
日時:5月21日(火)　18:30～20:30
対象:高校生以上
定員:毎回先着40名(申込不要です。直接会場におこしください。)
会場:札幌市博物館活動センター5階講義室
(中央区北1西9リンケージプラザ内)

＊＊＊この講座は8月まで毎月第3火曜日に開講します。＊＊＊

開催中!

第3回iミュージアム企画展

芸術の森の自然

みなさんよくご存知の『芸術の森』。いつもは美術作品を見たり、工芸をしたりしに行く人が多いと思いますが、周りの森の中には様々な生き物が暮らしています。今回はその動植物たちを写真で紹介します。今度芸術の森に行くときには、林の中もじっと鑑賞してみてください。

開催期間:平成14年4月20日(土)
～6月15日(土)
協力:札幌市芸術文化財団（札幌芸術の森）
会場:iミュージアム・ギャラリー（博物館活動センター5階）

さっぽろ市
03-F09-02-211
14-2-27